

# シノドスへの歩み みことばと共に 主の受難の主日C年

小西広志

2022年4月10日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当の小西広志神父です。今日は、2022年4月10日、主の受難の主日です。主日のミサの三つの朗読箇所をシノドス的教会の観点から読んで、味わってまいりましょう。

## 主がしてくださる

今日の第一朗読は「主のしもべ」の第3の歌からです。『イザヤ書』40-55章は第2イザヤと呼ばれていますが、時代はバビロン捕囚時代（紀元前6世紀）です。第2イザヤには4つの「主のしもべの歌」と呼ばれるものが収められています。聖週間の間には、月曜日に第1の歌、火曜日に第2の歌、水曜日に第3の歌、聖金曜日に第4の歌と順に朗読されていきます。神のことばを受け、それを伝えたために迫害を受けた主のしもべをイスラエルの民全体の運命として、あるいは将来現れるメシアの姿としてイスラエルの民は理解してきました。そして、初代教会の人々は、主の召命を受け、人類の罪を背負って苦難を受けたしもべの姿と十字架に架けられたキリストの姿を重ね合わせたのです。それで福音書記者は、人々は「イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら……」（マタ26章67節）と、イエスの受けた侮辱を記すのです。今日の朗読箇所には

**「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え 疲れた人を励ますように  
言葉を呼び覚ましてくださる。  
朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし  
弟子として聞き従うようにしてくださる」。**（イザ50章4節）

とあります

「主が～してくださる」。という表現に注目しましょう。わたしたちは主によって変えられる。変えてくださる主の働きに身を委ねなければならないのです。

続いて

**「打とうとする者には背中をまかせ  
ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。**

顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた」。(イザ 50 章 6 節)

とあります。

主なる神によって変えられることは、人々から嘲りの的となることを意味します。それでもかまわないのです。なぜなら、このしもべは主と深く結ばれているからです。

## かえって自分を無にして

今日の第二朗読は古代教会のキリスト賛歌で、キリストの無化と死にいたるまでの従順、それに続く高挙を表わしています。キリストの地上での生活は、しもべの姿、つまり仕える者、神と人々に奉仕する姿で要約されます。人々が救い主(メシア)に抱いていたイメージと、イエスさまの生涯にはギャップがありました。そこに神の神秘が秘められているということをこの賛歌は歌っています。

朗読箇所直前に「キリスト・イエスが抱いておられたのと同じ思いを抱きなさい」(フィリ 2 章 5 節、フランシスコ会訳)とあります。わたしたちができる神さまへの最大で最高の応答の仕方です。そして、イエスさまが抱いていた思いが今日の朗読箇所です。つまり、自分に固執せずに、無となっていく道です。

## 神を賛美して言った

今日の福音朗読で味わいたいのは百人隊長の姿です。「百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した」(ルカ 23 章 47 節)とあります。

「正しい人」は「イザヤ書」の苦しむ「主のしもべの歌」の四番目の歌の最後の部分を思い起こさせます。次のようにあります。「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った」(イザ 53 章 11 節)

鞭打たれ、十字架を担がされ、着物を剥ぎ取られ、茨の冠をかぶされたイエスさまの姿の中に、「主のしもべ」を見いだしたのは異邦人であるローマの兵隊の隊長、百人隊長でした。そして、彼は神を賛美し始めます。「ルカによる福音書」には賛美を知らなかった人々が、イエスさまと出会うことで賛美していくようになる場面がたくさんあります。さらに、「ルカによる福音書」はザカリアの神殿での賛美の場面から始まり、エルサレムの神殿の境内での賛美で終わります(1 章 5 節、24 章 53 節参照)。

今日の福音朗読に登場する百人隊長は、どのようなところから賛美を始めたのでしょうか。どのような賛美をしたのでしょうか。イエスさまの十字架の死の出来事が賛美のきっかけとなるのはどのようなことなのでしょう。「百人隊長はこの出来事を見て、神を賛美して言った」(23 章 47 節 フランシスコ会訳)。何げない短い聖書の一節ですが、わたしたちを黙想にいざなうみことばです。

## まとめ

今日の三つの朗読を味わってみて、シノドスの教会の観点から眺めてみると、いかにわたしたちの信仰が満たないかを知らされます。主なる神によって変えられた「主のしもべ」は、「自分を無にして」いく道を歩みます。無となっていく道こそが、しもべが神さまに答えていく唯一の仕方だからです。イエスさまも十字架の上で無となっていきます。それがイエスさまの生き方だからです。

かつて、大阪教区の和田幹男神父さまとお話しした際に、和田神父様はすばらしい聖書学者ですが、このよ

うに語られたことを印象的に覚えています。「神を愛し、隣人を自分のように愛するという律法の掟を徹底的に生きた一人のイスラエルの男が行き着く先は十字架しかなかったのです」。この短い解説は、わたしのころにしみました。そう、イエスさまにとって十字架は彼の生き方の目的であり、頂点だったのです。その生き方に直面して、百人隊長は神を賛美します。

教会は神さまを賛美する場所であり、神さまを賛美し続ける共同体です。「賛美する」という神さまが教会に与えてくださった大切なものを、いわば教会の本質というものを、わたしたちは時として忘れてしまっているのではないのでしょうか。

小教区共同体では多くの方々奉仕していただきます。典礼委員会も大切でしょう。聖歌隊も大切でしょう。教会学校も大切でしょう。数々のボランティア活動も大切でしょう。教会委員会による小教区共同体の運営も大切でしょう。しかし、いちばん大切なのはわたしたちがイエスさまを通して神さまを賛美するために教会に集っているのだという事実です。この点をないがしろにしてしまったら、教会は信仰の共同体とはならないと思います。

わたしはかつて外国籍の信徒の方々と共にミサをささげることがよくありました。彼らと一緒にミサをしていると、ミサとは神さまを賛美する時なんだなどと改めて教えられます。ほかの文化の方々、ほかの言語の方々と一緒に信仰の共同体を作り上げていくことは、信仰の本質を体験するよいチャンスとなるように思います。皆さんはいかがお考えですか？

それではまた来週。よい復活祭をお迎えください。